

上智大学の岡田隆先生からバトンを受けました。私はもともと心理学の出身ですが、生理学教室で博士の学位を取得し、現在は薬理学教室に所属しています。これで次に病理学に行けばグランドスラムかなと思いますが…おそらくそれはないでしょう。あちらこちらを渡り歩いておりますが、基本的には自分は生理学者であると考えており、生理学者ならではの視点から研究に取り組む努力をしています。2001年から2004年までの3年間、UC BerkeleyのMu-ming Poo教授の研究室に留学していましたが、その頃から精神疾患に興味を持ち始め、帰国と同時に精神疾患の基礎研究に着手しました。心理学の出身ですから、もともと精神や心と言った類の問題に対する興味はありました。その意味では原点回帰したとも言えます。しかし自分は生理学者であり、主として用いている技術は電気生理学的記録法です。このような立場から精神疾患の問題に如何にして取り組むべきか。とりあえず思いつくのは、動物にストレスをかけたり、薬を投与したりして疾患モデルを作って解析する。ノックアウトマウスを疾患モデルとして用いる、等々。実際、全て試しました。当初は手探りの状態でしたが、この1、2年でなんとか手ごたえのある結果が得られるようになってきました。それと同時に、この分野においても生理学

者が参入すべきであると思うようになりました。例えば、何らかの向精神薬を動物に投与します。それによって生じる脳神経系の変化を電気生理学的に解析する。かなり色々なことが起こります。驚くようなことも起こります。同時に行動や遺伝子発現の変化も解析してみる。これらの解析結果を統合して、生じた変化の機能的意義を検討する。その際に必要なのは、やはり生理学的な物の考え方であると思います。動物モデルを用いた、特に遺伝子改変マウスを用いた生物学的精神疾患研究は年々増えています。しかし、分子レベルからいきなり行動に飛んでしまっていて、その中間にあるべき生理学的解析が不十分、あるいは全く行われていないことがしばしばあります。一見、自分達と同じようなアプローチに見える研究も沢山ありますが、生理学的あるいは生理学者的視点が欠けていることが多々あります。その中には、生理学的解析を行うと驚くようなことが起きているのではないかと思われるものもあります。今が狙い目であるというような意味ではなく、本来もっと多くの生理学者が取り組むべき研究対象であると私は思います。「電気生理の技術」ではなく「生理学者」が必要です。やや抽象的な話が多くなりましたが、日々このようなことを考えながら研究を続けています。